九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「差し迫った命令」に関する覚え書き : 日本語のテンスとモダリティの接点

有田, 節子
大阪樟蔭女子大学

https://doi.org/10.15017/1518731

出版情報：九州大学言語学論集. 35, pp.382-397, 2015. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン：
権利関係：

「差し迫った命令」に関する覚え書き
−日本語のテンスとモダリティの接点−

有田　節子
（大阪樟蔭女子大学）
arita.setsuko@osaka-shoin.ac.jp
キーワード：テンス、アスペクト、モダリティ、

1　問題の所在

本研究は日本語のテンス・アスペクト形式スル・シタ・シテイルの意味を統一的に記述するにあたって問題となる「モーダルな意味」の扱いについて考察する。ここでモーダルな意味というのは、事態の現実／非現実に関与する意味のことで、発話時あるいは主節時のような基準時との間の先後関係や、事態の継続・完了・結果の状態のようなテンポラルな意味とは区別される。本稿ではこれまでどちらかと言えば別扱いとされてきたスル・シタによる命令用法の位置づけを中心に考察する。

日本語のテンス・アスペクトに関する先行研究は膨大で、モーダルな意味を取り上げたものも数多く存在する。それらすべてを把握することは筆者の力量不足でかなわないのだが、少なくとも、それぞれの形式のモーダルな意味をテンポラルな意味の中に位置付けようとするのとテンポラルな意味をモーダルな意味の中に位置づけようとするのと二通りのアプローチが認められる。前者の立場をとる定延（2004）は、ムードのタ（「発見のタ」「思い出しのタ」「知識修正のタ」「反実仮想のタ」）は情報の「アクセスポイント」が「過去」であることを示すとしている。後者の立場をとる工藤（2004）は、テンス自体を「〈話し手の現実世界の事象の確認〉というムードのなかで成立する。」と捉えている。

本稿が特にとりあげたい命令用法については、シタ形の特殊な用法として別扱いにされることが多い。日本語のテンス研究において、いわゆるムードの「た」がとりあげられている上記の研究でも、言及はあるものの考察の対象外にされており、その位置づけは曖昧にされたままである。

2　問題の背景：スル・シタのモーダルな用法

2.1　テンスとアスペクト

本稿は、テンスを「事象を時間的に位置づける文法カテゴリー」と捉える。過去時制と非過去時制の区別を基本とする。日本語においてそれを担う形式として、いわゆる「過去形」（「歩いた」「食べた」「美しかった」「便利だった」）と「非過去形」（「歩く」「食べる」「美しい」「便利だ」）の２形式を認める立場をとる。以後便宜的にそれぞれを総称してシタ、スルと呼ぶことにする。

一方、アスペクトは「事象の内的な時間構造に関わる文法カテゴリー」と捉える。「完成相 (perfective)」、「未完成相（imperfective）」の区別を基本とする。日本語のアスペクト形式として何を認めるのか議論のあるところだが、ここでは、便宜的に、完成アスペクト形式としてスル・シタ、未完成アスペクトの代表的な形式としていわゆる「テ形＋イル」を認め、以後後者をシテイルと呼ぶことにする。シテイルはシテイタと非過去・過去のテンスとしての対立があるが、本稿はスル、シタを中心に扱い、シテイルとシテイタの詳細には立ち入らないので、以後、未完成アスペクト形式であるシテイル・シテイタをまとめてシテイルと表記する。

テンスとアスペクトを捉えるのに、先後関係としての「同時（synchronous）」と「後続（posterior）」という関係概念を認めることにする。

以上、「過去／非過去」「完成／未完成」「同時／後続」の三種類の二分法的関係 (Broekhuis and Verkuyl 2014)でスル・シタ・シテイルのテンポラルな意味を捉えることとする。

2.2　テンポラルな用法とモーダルな用法

述語のシタ形はその述語によって表される事象が過去、すなわち、発話時よりも以前に成立したことを示す。一方、述語のスル形はその述語によって表される事象の成立が過去ではなく、現在または未来に成立することを示すのが基本である。

（1）　a　昨日は会議に出席した。
　　b　昨日は暖かかった。
（2）　a　明日は会議に出席する。
　　b　今日は暖かい。

本稿がモーダルな用法と呼ぶのは、一つには、シタが事象を過去に位置づけているとは捉えられないような次のような現象である。（尾上1979, 1982, 定延2004など。）

（3）　a　なんだ、こんなところにあった。（発見）

b　昨日太郎に会ったんだけど、ずいぶん背が高かったよ。（過去の認識）

c　正解はCでした。（知識修正）

d　そうか、明日の会議は７時からだった。（思い出し）

e　さあ、子供は帰った、帰った。（要求）

f　ええい、学校やめた。（決定）

g　よし、これで勝った！（見通しの獲得）

(3a)の「あった」の存在の主体は、発話時点においても話者の眼前に存在し続けているもので、(1b)とは違って現在と切り離された過去の事象を表すものとは言えない。(3b)において太郎は昨日に限らず発話時現在においても、おそらく未来においてもその高さは変わらないだろう。(3c)で正解がCであることは発話時現在も変わらないことである。(3d)は明日の会議についての言明である。(3e)のシタはぐずぐずしている子供に帰るよう要求している。(3f)は発話時以降に成立するであろう自分の行為を先取りして述べるのにシタが使われている。(3g)は未来の事態の成立を見通しての言明である。

スルが過去の事象に対して使用される次のような現象も、疑いなくスルのモーダルな用法と言える。

(4)　a　「はて、どうしたものか」

主人の藤兵衛は、狼狽してしまった。藤兵衛はちかごろ老いが目立っているが、体の故障はない。ただひとまわり小さくなったのと、少壮のころには多少はあった悍気がとみに失せてきたせいか、媼のようにやさしい顔になっている。（司馬遼太郎『播磨灘物語（２）』）

b　「いんや、ちがうね。邸の男衆だの山道だの、あんたがよく心配しているたぐいのことも、この京ちゃんには無縁だしな。結局あいつらは、見くだすものがほしいんや」

母のほおが染まった。

「フミさん、ひどいことを言うね。それじゃまるで、うちの子が–」とせきこんだが、思い直したようにいった。（藁科れい『異人館の少女』）

c　「お姉ちゃん、ホントは水口さんのことが好きなんじゃないの？」

「何言い出すのよ、いきなり」（工藤2013:172より）

d　「ひどく憤らせちゃったもんだな」

「お前が変なこと言うからだ。あれでは憤るよ。だいたい、遠山が起きなくてもいいのに起きたりするからだ」（工藤2013:170より）

(4a)はいわゆる「歴史的現在」の用法である。(4b, c)は対話における相手の先行発話に対するマイナスの「評価感情」あるいは「意外性」が含みとしてある。(4d)では過去の事象に言及しながらも、発話時において話し手が当然だと思っていることが前面に出されている。工藤は(4a)を「劇的現在用法」、(4b,c,d)を「評価感情の現在用法」と呼んでいる。

(3), (4)の諸例は、過去の事象ではないのにシタ形が、現在でも未来でもない事象にスル形が、それぞれ用いられているという点で、両形式のテンポラルな用法とは区別して扱われるべきであろう。

(3e,f,g)のような現象はその存在の指摘はあるものの、一部の例外を除いて、特殊な用法として、別扱いされるのがほとんどであるが、本稿は、シタが未来の事態の成立を表すこれらの用法についても、その位置づけを考察する意味はあると考える。[1]

2.3 シタによる未来の事態成立用法

前小節でとりあげたモーダルな用法のうち、(3a～d)は、冒頭に述べたように定延(2004)で情報のアクセスポイントが過去であると分析され、テンポラルな用法との関連が述べられている。同様の例を工藤(2013)は話し手にとって既知の情報または新情報を確認する用法として捉え、(4a～d)と統一的に扱うために、「確認済みの事実」で「聞き手への事実の伝達ではない」場合で、かつ、「過去の事実に対する話し手の評価感情の前面化」の場合に過去の事象にスル形が用いられ、「現在も成立する事象に対する話し手の事実確認のしかたの前面化」において現在の事象に対してシタ形が使用されるとしている。

では残る(3e,f,g)をどうするか。

これらのうち、(3e)のような聞き手への働きかけ用法については、いわゆる命令形による働きかけとは異なり、「差し迫った要求」（寺村1984）、「いますぐの命令」（高橋1986）と言われるように、発話の時点での動作を迫っているのであって、「１時間後に、帰った、帰った。」のように時間帯を指定することができない点で特殊な命令表現といわれている。

---

[1]英語においても次のような現在完了形による否定命令で聞き手への差し迫った要請を表すことがある。(Schwager 2011) 同様の現象はドイツ語にもあると言われている。

Please don't have broken another vase!

このような現象との関連については今後の課題とするが、日本語のシタ形による命令用法は通言語学的にみても特殊なものとして別扱いするべきものではないと考える。

(3f, g)のような事態の成立を先取りして述べる用法も、上記の命令用法同様、「ええい、明日学校やめた。」「よし、これで来週勝った。」が不自然であるように、未来の特定の時間帯を指定できないという特徴がある。

「差し迫った要求」とされる(3e)と類似の用法や、(3f,g)のような決定用法や見通しの獲得用法と類似の用法はスル形にもある。

(5) a　さあ、さっさと歩く。
　b　もう、学校やめる。
　c　よし、これで勝つ。

このうち、(5a)で表される聞き手への働きかけは、(3e)の「帰った、帰った」同様、未来のある時点のことではなく、発話時点（あるいは直後）に成立させるよう働きかけるものである。「明日、さっさと歩く。」という表現は、聞き手への働きかけにはならない。命令形が未来の一時点に成立させることを聞き手に働きかけることができる（「明日は、もう少しさっさと歩けよ。」）のとは区別される。

一方、(5b)および(5c)は、「私、今月末で学校やめる。」「よし、来週の試合はこれで勝つ。」のようにスル形を用いて発話時に未来における自分の行為の遂行の「意志」を述べることができ、事象が発話時以降に成立することを表すスルのテンポラルな意味と見なすことができる。シタの(3f,g)の「先取り」はスルの(5b,c)の「意志」とは区別する必要がある。

本稿はシタ形、スル形の命令用法を中心にスル・シタのテンポラルな意味とどのような関係にあるのか、その位置づけについて考察する。

3　スル、シタのテンポラルな意味

3.1　スル、シタのテンス的意味

現象の分析に先立ち、1.1節で述べた本稿が認める三種類の二分法的な関係概念について田窪(2008)で提案された形式化を援用して示すことにする。

本稿が前提とする関係概念は、「過去／非過去」、「完了／未完了」、「同時／後続」の三つの対立である。今、述語が表すイベントをeとし、それが時空間に占める時間の幅（インターバル　interval）をτ(e)と表すこととする。インターバルa, bについて、a＝bで「aとbは同時である」、a＜bで「bはaに後続する」という関係を表す。

田窪(2008)に沿い、eの始まり(start point)をs(e)、eの終わり(final point)をf(e)で表すと、「読む」のような活動（action）動詞[2]、「服を着る」のような達成

[2] 動詞の分類はVendler(1967)の分類を用いる。

（accomplishment）動詞の場合、それが表すイベントは、s(e)＜f(e)となる。一方、「倒れる」「死ぬ」のような到達（achievement）動詞の場合は、s(e)=f(e)となる。

発話時（utterance time）をUTとすると、スル、シタのテンポラルな意味は述語の語彙的意味により、以下のように表しわけられる。

(6) a 本を読んだ。（活動動詞） s(e)＜f(e) UT
b 服を着た。（達成動詞） s(e)＜f(e) UT
c 道で倒れた。（到達動詞） s(e)＝f(e) UT

(7) a 本を読む。 UT s(e)＜f(e)
b 服を着る。 UT s(e)＜f(e)
c 道で倒れる。 UT s(e)＝f(e)

動態述語のシタ形はその事象の終結時が発話時と同時かそれ以前であること、動態述語のスル形はその事象の開始時が発話時と同時かそれ以後であることを(6)、(7)は示している。なお、終結時あるいは開始時と同時（あるいは接触している）という解釈については、後で一部触れるが詳細は田窪(2008, 2012)を参照されたい。

状態述語はイベントの始まりや終わりによっては定義できない。その状態eが時間の幅πで成立していることをπ(e)で表し、ある時点（R）において成立していることをR∈π(e)で表すこととすると、状態述語のシタ形、スル形の文の意味は以下のようになる。

(6) d ここに財布があった。 R＜UT, R∈π(e)
(7) d ここに財布がある。 R＝UT, R∈π(e)

3.2 スル、シタのアスペクト的意味

日本語のスル、シタはアスペクト的には、完成か未完成かによってシテイルと対立すると考える。本稿はスル、シタを中心的に扱うので、シテイルのテンポラルな意味について詳しく論じるつもりはないが、「未完成(imperfective)」という概念が上記のような枠組みでどのように捉えられるかという点のみ触れておきたい。

田窪(2008)はIgarashi & Gunji (1998)のリセットタイム(rと表示)という概念を導入することで、シテイルの持つ複雑な意味を表示している。リセットタイムとは、変化した状態から元の状態に戻る時点を指す。たとえば「服を着る」という事象であれば、sが服を着始める時点、fが服を着終える時点で、rは服を脱いであらたに服を着ることができる状態に戻った時点を指すことになる。リセットタイムは到達動詞の「倒れる」と「死ぬ」の表す「変化」の違いを適切に捉えることができる。「倒れる」によってもたらされる変化は、倒れた主体が

再度立ち上がった時点（これがリセットタイムとなる）でもとに戻る、すなわち、リセットされる。それに対し、「死ぬ」や「腐る」のような事象では、元の状態に戻ることは想定できないので、リセットタイムは設定できない。

田窪(2008)ではシテイルの意味がs, f, rによって次のように定義されている。活動動詞のシテイル形は動作の進行と経験の意味があるが、それはシテイル形が表す時点tの範囲がs(e)とf(e)の間であるか、f(e)以降であるかによって区別されている。

(8) a 僕は（今）司馬遼太郎の本を読んでいる。s(e)＜t＜f(e) 〈進行〉
b 僕は先週司馬遼太郎の本を読んでいる。 f(e)＜t 〈経験〉

達成動詞のシテイル形は進行の意味だけでなく結果の状態の意味を表わしうる。もちろん、経験の意味もある。達成動詞のシテイル形が表す時点の範囲がf(e)とr(e)の間の場合に結果の状態、r(e)以後の場合に経験の解釈になる。

(9) a 私は（さっきから）タイトなブラウスを着ている。
s(e)＜t＜f(e) 〈進行〉
b 私はタイトなブラウスを着ている。 f(e)＜t＜r(e) 〈結果の状態〉
c 私は先週このタイトなブラウスを着ている。 r(e)＜t 〈経験〉

到達動詞には、先述のように、リセットタイムがある動詞とない動詞がある。「倒れる」のようなリセットタイムが設定できる動詞の場合は、結果の状態と経験の二つの意味があり、「腐る」のようなリセットタイムが設定できない動詞の場合には、結果の状態のみの意味となる。[3]

(10) a 山田さんが倒れている。 s(e)＝f(e)＜t＜r(e) 〈結果の状態〉
b 先週の飲み会でも山田さんは倒れている。r(e)＜t 〈経験〉

(11) りんごが腐っている。 s(e)＝f(e)＜t 〈結果の状態〉

以上のような枠組みでは、スル、シタのアスペクト的意味はどのように捉えられるだろうか。

(6a, b, c)はシタが動詞の語彙的意味によらず、事象(e)の始まりから終わりまでが発話時以前であることを表示し、シタの完成相としてのアスペクト的意味を適切に捉えている。

しかしながら、実際の使用では、たとえば次の例のように、事象の始まりの局面を指示しているようなものもある。

(12) M018：やーでもねー、院に進んでよかった。

---

[3] ただし、「腐る」や「死ぬ」が複数の事象を指している場合には、リセットタイムは設定でき、経験の解釈も出てくる。
・ 先週の台風では多くの人が死んでいる。
・ 毎年、コンテナの中に放置されたせいで、多くのリンゴが腐っている。

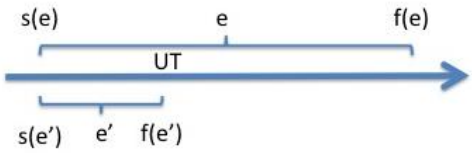
F128：何かねー、世界が広がった感じだよね。

M018：広がった。

F128：あんたはほんと広がっとるよね。（名大会話コーパス）

上記の例の「広がった」は広がるという事象全体の終結を意味しているというより、「広がる」という達成動詞の表す変化事象の開始の局面が終結していることを意味していると言える。言い換えれば、「広がる」という事象eの開始部分の部分事象（e'とする）が発話時において終結していることを表しているということである。全体事象eから見れば、それは途中段階に過ぎず、その意味ではシテイル形との違いはそれほどない。実際、続く発話では「広がっとる」とシテイルの方言形によって言い換えられている。シテイル形との違いは、全体事象であれ部分事象であれ、その終結の局面に至っているかどうかという点で、シテイルは発話時において当該の全体事象eの終結の局面に至っていないことを表示し、シタは発話時が当該の部分事象e'の終結時であることを示している。

図１



「あ、来た、来た。」のように、バスが来ていないのに見えた段階で「来た。」と述べるような場合もこれと同様に捉えることができる。

一方、(7a, b, c)はスルが事象の開始から終結まで全体が基準時以後であることを表していることを示しており、スルの完成相としての特徴を捉えている。スルが (13)のように発話時における決断を表したり、(14)のような意志を表したりできるのも、スルの完成相としての性質によるものと見なされる。

(13)　F101：うん。じゃあ私ね、ミルクレープにする。（名大）

(14)　F150：なんで？

F106：うん、で、その理由を今から説明する。（名大）

しかし、一方で、刻一刻と変化する事象がスル形で表される例も散見する。

(15)　F099：ふふふふふ。＜間＞ああ、気持ちいい。

M021：動く？

F099：うん、すごく動く。あ。（名大）

(16)　F057：インタビューみたいになっちゃう。

F037：こっち向かないで。＜笑い＞なんかすごい緊張する。（名大）

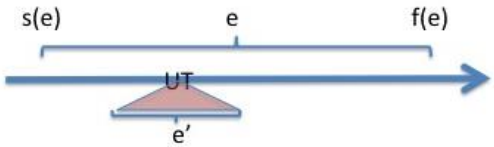
(17)　M021：これでだいじょぶだと思うんだけどな。もうちょっと。これでい

いんかな。よいしょ。お待たせしました。緊張してる。＜笑い＞（名大）

(15)の「すごく動く」は発話時の時点で動きつつあることを表現している。(16)は話し手の発話時における精神状態を表現しており、同じような状況でシテイル形が現れうることを(17)は示している。勿論、これらは(7d)のようなアスペクトの対立のない状態述語で表されるような事象とは区別される。このような現象はどのように捉えられるべきか。

スルのアスペクト的意味についても、事象全体(e)とは別に、その部分事象(e')を想定することによって適切に捉えられると考える。すなわち、(7)の a〜c あるいは(13), (14)のようなスル形は事象の開始から終結までの全体を表しているのに対し、(15)〜(17)のようなスル形は部分事象、この場合は、発話時を含む幅のある時間帯によって切り取られた部分事象全体をスル形が表しているのである。シテイル形が事象全体の各局面（部分）を表していることと結果的に重なりがあるために、(16)、(17)のように類似した状況をスルでもシテイルでも表しうることになる。

図２



スル、シタは事象全体を表すという完成相として捉えられる一方で、開始局面という部分的な事象が発話時に終結することをシタが表したり、基準時を含む時間帯によって切り取られた部分事象全体をスルが表したりする場合があることを指摘した。

4　スル、シタのモーダルな意味

4.1　シタ、スルの命令用法の特徴

本節では、３節で見たシタのテンス・アスペクト的意味を踏まえた上で、シタによる命令用法の扱いについて検討する。

ここであらためて、シタの命令用法の特徴について、日本語記述文法研究会(2003)に沿ってまとめておく。

(18) a　ほら、さっさと行った、行った。
　　b　安いよ。｛買った、買った。／?買った。｝
　　c　*どいたよ、どいたよ。
　　d　*明日行った、行った。

まず、(18a)にあるように、聞き手に注意を向かせる感動詞が共起することが多い。ただし、なくても成立する。次に、(18b)にあるように、同じ動詞が繰り返されることが多い。ただし、単独でも成立する。(18c)にあるように、終助詞の「よ」をつけることができない。「どけよ。」のように命令形に「よ」が後接するのとは区別される。(18d)のように発話現場での実行を要求する場合に限られる。命令形が「明日東京に行け。」のように言えるのとは区別される。「差し迫った」と言われるのは４つめの特徴があることによる。

では、このような性質を持ったシタによる命令用法は命令という言語行為としてどの程度特殊なのであろうか。ここで、サール（Searle 1979）の言語行為論における命令という発語内行為の適切性条件について、中田(2009)を参照しながらまとめておく。

「命令」は「依頼」「懇願」とともに、聞き手にある行為をさせるための試みとして見なされる「指令型 (directives) 」の発語内行為とされている。以下は「依頼」の適切性条件である。

(19)　指令型（依頼）

事前条件：*H*は*A*をする能力を持つ。*S*は*H*が*A*をする能力を持つと信じる。*S*と*H*の両者にとって，通常の事態の進行において*H*が*A*をすることは自明ではない。

誠実性条件：*S*は，*H*が*A*をすることを欲する。

本質条件：*H*に*A*をさせる試みとして見なされる。

命題内容条件：AはHによる将来の行為である。

命令には、この適切性条件に加え、事前条件として自らが相手に対して権威のある地位にいるという条件が加えられるという。

中田(2009)は終助詞ヨとネを言語行為論の観点から分析したものだが、そこでは、ヨは事前条件を焦点化する機能を持ち、ネは誠実性条件を焦点化する機能を持つとされている。「行ってください。」のような依頼表現では「行ってくださいね。」「行ってくださいよ。」が共に可能であるが、明示的な命令文である「行け。」においては、「行けよ。」は可能だが「*行けね。」は不可能である。命令において、事前条件として相手の能力があることやその能力を持つことを話し手が信じること、さらに、相手に対して権威のある地位にいることが強調されることは問題ないが、誠実性条件が焦点化されて、相手への願望があることがことさらに強調されてしまうのは命令行為としては適切ではない。それゆえ、ネは命令形に後接しないと説明することができる。

さて、(18c)として示したように、シタによる要求文では、ネだけでなくヨも後接することはできない。つまり、事前条件を焦点化することもできないとい

うことになるが、これはどのように考えるべきであろうか。事前条件は相手の能力や、相手と自分との上下関係といった話し手と相手との関係に関する条件である。そこを焦点化できないシタ形による要求用法は、要求でありながら相手のことを考慮しない、いわば、自己完結型の要求であると言うことができる。

なお、スル形による命令も終助詞ヨを後接できないし、未来の時間帯を指定することもできない（鄭1993）が、これもシタ形と同様、発話現場での実行の要求であり、また、行為者である相手の能力や話し手との関係に関与しないような命令と捉えるべきであろう。

(20) a　さあ、さっさと行く。
　　b　*さあ、さっさと行くよ。
　　c　*さあ、明日行く。

シタ形、スル形の要求用法の持つこのような「差し迫り」感はどこからくるのか。テンポラルな意味から導出できるのか。

4.2　直近の未来と直近の過去

本稿は、3.2で示した発話時を含むインターバルによって限定される部分事象という概念によって、差し迫りという現象の説明が可能になると考える。

シタ形は、事象の開始から終結までの全体が発話時以前に位置づけられることを表すだけでなく、(12)のように、開始局面という部分事象の終結が発話時に位置づけられることも表すことは既に見た。その部分事象が位置づけられるのは遠い過去ではなく、直近の過去である。シタという形式自体は近い過去も遠い過去も表すのだが、開始局面という部分事象に焦点をあてることにより、その解釈は遠い過去ではなく直近の過去になるのである。

シタの解釈が直近の過去に限定されるという現象は、田窪(2008), Takubo (2011)に述べられているように、トコロダという形式が後続する場合にも顕著になる。下記に見るように、動詞のアスペクト的意味に関係なく、直近の過去の解釈が義務的となる。田窪は、トコロが基準点を表し、事象の開始あるいは終結などの局面を指し、ダにより、それが発話時に位置づけられることから説明している。

(21) a　本を読んだトコロダ。　　s(e)＜[f(e)　UT]
　　b　服を着たトコロダ。　　s(e)＜[f(e)　UT]
　　c　道で倒れたトコロダ。　　s(e)＝[f(e)　UT]
(22) a　本を読むトコロダ。　　[UT　s(e)]＜f(e)
　　b　服を着るトコロダ。　　[UT　s(e)]＜f(e)
　　c　道で倒れるトコロダ。　　[UT　s(e)]＝f(e)

シタ形＋トコロが事象の終結の局面を指し、ダが発話時に位置づけられるために、直近の過去の解釈が強制され、スル形＋トコロは、事象の開始の局面を指し、ダが発話時に位置づけられるために直近の未来の解釈が強制される。

トコロダの存在があることにより、終結の局面が義務的に切り出され、シタが直近の過去を表すことになるのだが、トコロダがなくとも、「（たった今）本を読んだ。」「（たった今）服を着た。」「（たった今人が）道で倒れた。」のように、事象の終結の局面が発話時の直前であるような解釈は可能であり、また、「（今まさに）本を読む。」「（今まさに）服を着る。」「（今まさに人が）道で倒れる。」のように、発話時の直後に事象が開始することをスルで表すことも可能である。

終結に限らず、シタ形により事象の開始の局面がフォーカスされうることも(12)で見たし、スル形が発話時を含む時間帯に成立するような部分事象を表すことも(15)や(16)で見たところである。シタは遠い過去、直近の過去の両方を表し、スルは遠い未来、直近の未来の両方を表すのだが、発話時を含む時間帯に終結あるいは開始の局面が成立するような発話文脈が整えられた場合には、直近の過去、直近の未来の解釈になる。本稿は、命令という言語行為によりそのような発話文脈が整えられるのだと考える。

4.3　差し迫った命令の成立

命令は聞き手に対する実行の指令である。「行け。」のような命令形は聞き手に対する実行としてのみ働くが、命令形でなくとも、いわゆる義務的モダリティの表現（「～なければならない。」や「～すべきである。」）も適切な条件が整えば命令の指令となりうる。

シタは直近の過去に終結したことを示しうる。このようなシタが実行の指令となる場合、発話時点で実行済みであることを聞き手に要求することになる。[4] 事前条件としての聞き手の能力を焦点化するヨの後接が不適切なのは、直近の過去に終結済みであるという強力な指令であることから、聞き手にその能力があるかどうかが不問に附されることによる。未来の時間指定ができないのは、直近の過去に終結していることを示すシタの表す意味と適合しないからである。

実行の指令は発話時において成立する。スル形による指令は、発話時を含む

---

[4]なお、2012 年のロンドンオリンピックのボクシングで金メダルを獲った村田諒太がその妻の強い応援のエピソードとして、妻が五輪前から「金メダルを獲りました。」という想定の未来日記をつけて夫をもり立てていたことが話題になっていた。この「獲りました。」をシタによる実行指令と捉えると、それが村田にとって強力なプレッシャーになっていたことが想像できる。

時間帯にスルが表す事象が成立していることを聞き手に要求することになる。それゆえ、発話時とは切り離された未来の時間帯を指定することはできない。

5　終わりに

本稿はスル、シタ形のモーダルの意味の中でも、特に、命令用法の扱いについて論じた。スル、シタ形による命令という言語行為は、他の命令用法を持つ言語形式と同様、命令という言語行為が成立する適切性条件が整うことにより実行力をもつ。その成立が遠い未来ではなく直近の未来に限定されるという点は、スル形、シタ形のテンポラルな意味から導出される。すなわち、命令という言語行為が成立する発話時が焦点化された結果、スル形においてはその開始局面が発話時と接するという解釈が前面化し、一方、シタ形においてはその終結局面が発話時と接するという解釈が前面化する。いずれの場合も、発話時を含む時間帯においてその開始あるいは終結の局面が成立することを示すので、結果として差し迫った要求の解釈が出てくるのである。

本文では触れなかったが、シタによる「決定」や「見通しの獲得」用法も、発話行為が成立する発話時が焦点化されることにより得られる、シタ形による終結局面が発話時と接する解釈が前面化したものと捉えることができる。

スル、シタの持つ他のモーダルな意味との関係については稿を改めて論じることにする。

引用文献

Broekhuis, Hans & Henk J. Verkuyl (2014) Binary tense and modality. *Natural Language and Linguist Theory* 32, pp. 973–1009.

Igarashi, Y. and Gunji, T. (1998) The temporal system in Japanese. *Topics in constraint-based grammar of Japanese*, ed. by T. Gunji and K. Hasida. Dordrecht: Kluwer, pp. 81-97.

工藤真由美（2004）「現代語のテンス・アスペクト」『朝倉日本語講座６文法Ⅱ』朝倉書店.

工藤真由美（2013）『現代日本ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.

中田一志（2009）「発話行為論から見た終助詞ヨとネ」『日本語文法』9-2, pp.19-35.

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法３』くろしお出版.

尾上圭介(1979) 「「そこにすわる!」 ―表現の構造と文法―」『言語』Vol.8, No.5, pp.20-24, 大修館書店.

尾上圭介(1982) 「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1-2, pp. 17-29.

定延利之（2004）「ムードの『た』の過去性」『国際文化学研究』21, pp. 1-68.
Schwager, M. (2011) Imperatives and tense. *Tense across languages*, ed. by R. Musan & M. Rathert. Tu¨bingen: Niemeyer, pp. 37–58.
Searle, John R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge University Press. （邦訳版『表現と意味　言語行為論研究』山田友幸監訳　誠信書房　2006 年）
高橋太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.
田窪行則（2008）「日本語のテンスとアスペクト–参照点を表すトコロダを中心に–」『日本文化研究』第 25 輯, pp. 5-20.
Takubo, Yukinori (2011) Japanese Expression of Temporal Identy: Temporal and Counterfactual Interpretation of tokoro-da. *Japanese Korean Linguistics* 18, ed. by William McClure and Marcel den Dikken. Stanford University Center for the Study, pp. 392-409.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
鄭　夏俊（1993）「日本語における『ル』・『タ』形とモダリティ–文末形式を中心に–」『早稲田国語学研究と資料』17, pp.24-34.
Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

A note on so-called ‘urgent imperatives’ expressed by the simple past/non-past sentences: Tense and Modality interfaces in Japanese

Setsuko Arita
(Osaka Shoin Women's University)

This paper discusses how to relate the so-called “urgent imperatives” denoted by the simple past form, *-ta*, and the simple non-past form, *-(r)u* in Japanese to the temporal meanings of *–ta* and *–ru* forms. The reason they are called ‘urgent’ is that they cannot co-occur with any future temporal adverbs even though they are future-oriented. This phenomenon is regarded as one of the modal interpretations that the simple tense forms have in the sentence final position, which are disputable in the study of tense in Japanese grammar. In previous works, two types of approaches to the modal usages of tense have been used: one is to situate the modal usages in the temporal ones; the other is vice versa. The urgent imperatives, however, are not analyzed enough in either approach because they are apparently idiomatic. In this paper, I show that ‘urgency’ can be ascribed to the basic temporal meanings of *–ta* and *–ru*; that is, the immediate past denoted by *-ta* and the immediate future denoted by *–(r)u*. Though the *–ta* form has both immediate and remote past interpretations and also the *–(r)u* form has both immediate and remote future interpretations, the interpretation of these forms is limited to the immediate past/future in some particular contexts (Takubo 2008, 2011). I argue that the interpretation of *–ta/-ru* is limited to the immediate past/future even though they have both remote and immediate past/future interpretations. In other words, I claim that the urgent imperatives should not be treated as idiomatic but should be explained compositionally by their temporal meanings and the contexts of utterances.